

平成 27 年度の西の湖で肥育したセタシジミを放流した 試験区での稚貝生息状況

石崎 大介・磯田 能年・松尾 雅也（（公財）滋賀県水産振興協会）

1. 目的

セタシジミは近年漁獲量が著しく減少していることから種苗放流などの取り組みが実施されている。しかし、近年、産卵量と関連のある産卵期直前の肥満度（軟体部乾重量／体重×100）の低下が問題となっている。また、施設面等から種苗生産放流事業を拡大することは困難であり、自然の生産力を利用した増殖の取り組みが必要である。そこで、西の湖で垂下飼育して肥満度を上昇させたセタシジミ親貝を琵琶湖に放流し、周辺の稚貝の生息状況を調査してその効果を把握した。

2. 研究方法

琵琶湖で採捕した個体を 2014 年 12 月 4 日および 2015 年 2 月 26 日から 2015 年 5 月 7 日まで西の湖で垂下飼育して肥満度を上昇させた。それらを彦根市松原地先の水深 5 m に設定した試験区（松原試験区）と近江八幡市沖島地先の水深 4 m に設定した試験区（沖島試験区）（ともに 30×30 m）にそれぞれ 213 kg と 243 kg を 2015 年 5 月 9 日に放流した。

水温が 20℃を十分に上回り確実に産卵が行われた後の 8 月 5 日（沖島試験区）および 8 月 19 日（松原試験区）にエクマンバージ採泥器（採泥面積 20×20 cm）を用いて調査を行った。サンプリング地点は試験区内は 5 箇所とし、試験区周辺は松原試験区および沖島試験区でそれぞれ 9、11 箇所とし、それぞれオープニング 250、500 μm の篩で選別された稚貝を計数した。

3. 研究結果

試験区内の 1 回のエクマンバージ採泥器で採捕された個体数は両試験区とも 0～1 個体であった（図 1）。また試験区周辺では両試験

区とも 0～8 個体であった。松原試験区では試験区から北方向で 8 個体が採捕された地点があり、また付近の湖流は北向きに流れていることから、北方向へ分散した可能性がある。しかし、それ以外の地点はほとんどが 0 か 1 個体であることや、松原試験区では波浪が強いことから広く分散している可能性も考えられる。沖島試験区では北西方向で 6 個体や 8 個体と比較的多くの稚貝が採捕され、北西方向へ流されたと推察された。琵琶湖で同様な調査を行った場合、採捕される稚貝は 0～1 個体であることから、一定の効果があると考えられる。

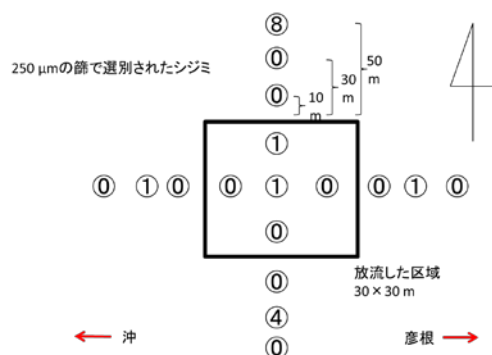


図1. 松原試験区でエクマンバージ1回あたりで採捕されたシジミの個体数

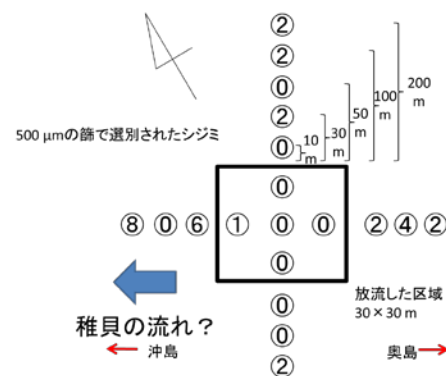


図2. 沖島試験区でエクマンバージ1回あたりで採捕されたシジミの個体数